

幼い頃に注がれる愛情が、 将来、自分を信じる力の源に。

「三つ子の魂百まで」という諺（ことわざ）があるように、人の性質や性格形成は乳幼児期の体験に大きく影響されます。3歳を迎える頃までに家族からたくさんの愛情を注がれ、本能的に「愛されている」と実感しながら成長した子どもは、将来にわたって、自分の言動に自信を持つようになります。

日本ハグ協会会長
高木さと子さん

誰にもできる簡単なコミュニケーション「ハグ」とコミュニケーションを合わせた「ハグニケーション」を提唱。企業、団体、家庭に向けてさまざまな講演活動やイベントに取り組んでいる。自身も17歳と15歳の男の子のママ。



「僕が3歳になるまでに、ママはちゃんと関わってくれていた?」。先日、高校1年生になる息子が、こんなことを聞いてきました。その時に、息子が持っていたのは家庭科の授業で使ったワークシート。その内容を抜粋して紹介します。

【子どもの時期の大切さ】

将来のその人自身をつくり上げる土台は、子どもの頃につくられる。なかでも乳幼児期は、体や知的能力、情緒など生涯にわたる人間の成長・発達の基礎がつくられる重要な時期である。

息子はまだ高校生ですが、親となり得る年齢になった今、子育てや愛情について学ぶことは、とても大切なことだと感じました。乳幼児期の子育てで最も重要なことは、子どもが「自分は愛されている」と本能的に実感できるように接すること。とくに3歳までの「愛された体験」は、大人になってから必須となる、自分で道を切り拓き、

自分を信じて進んでいく力につながります。反対に、幼少期に兄弟・姉妹との比較など、親からの何気ないひと言がトラウマとなり、その後の人生において自分の行動を無意識に制限してしまう人も少なくありません。つまり、幼い頃の記憶にも残らないような記憶こそ、潜在意識に入り込んでその後の人生を左右するのです。

「自分は大切な存在だ」という自己重要感をしっかりと感ずることができれば、人は夢や目標に向かって邁進することができます。子どもの将来のためにも、乳幼児期の子育てでは、たっぷりの愛情を注ぎ、「あなたのママになれて幸せ」という気持ちを何度も、何度も伝えてあげましょう。

